

南河内普及だより



富田林市・河内長野市・松原市・羽曳野市・藤井寺市・大阪狭山市・太子町・河南町・千早赤阪村

～12年間の絆でぶどうを守る～ ぶどう塾NPO法人設立総会を開催！

大阪府は全国第7位の生産量を誇るぶどうの産地です。中でも、南河内地域には約250haのぶどう園があります。しかし、担い手不足と生産者の高齢化により遊休農地が増加しています。

そのような状況の中、「ぶどう塾」は、担い手を育成することを目的に、当事務所と太子町等が連携して、平成12年から実施し、延べ367名がぶどう栽培の基礎を学びました。

修了者のうち、約80名が援農隊（ボランティアグループ）として、栽培が困難となったぶどう園の管理や農家への作業支援を行っています。

しかし、太子町ではぶどう農家の約半数が70歳以上と高齢化が著しく、依然として毎年数haずつのぶどう園が遊休化する等、縮小への歯止めがかからない上、援農隊も、自身の高齢化や長年の課題を抱え、農家に対する十分な支援ができていない現状にありました。

そこで、一昨年の9月から太子町、当事務所、大阪府農の匠、援農隊、出荷組合長等が集まり、産地の維持、発展に向けた取組について議論を重ねた結果、農家とボランティアとの連携を強化し、より迅速な意志決定体制の確立や、円滑な援農活動には社会的信用を獲得することが大切との考えのもと、資金管理が明瞭で非営利であるNPO法人が最もマッチするとの結論に達しました。

その後、NPO法人設立のための条件整備を精力的に行い、平成24年12月11日、NPO法人の設立総会を迎え、今年4月には全国でも非常にめずらしい、農家と都市住民ボランティアによる支援法人が立ち上がる予定となりました。

法人設立者は農家（4名）と都市住民（7名）の計11名。4名の農家のうち3名は「大阪府農の匠」、残り1名は塾修了後、ぶどう農家となった異色の経歴の持ち主です。都市住民7名はぶどう塾修了生でボランティア活動の最前線で活躍してきたリーダー的存在の人たちです。

このように、12年間の歳月をかけて、有能なボランティアを発掘し、ボランティアとぶどう農家との絆を深めてきた「ぶどう塾」は4月から法人組織へと成長し、ぶどう農家の期待を一身に背負い、大きく羽ばたこうとしています。



▲法人設立に向けた検討会風景

ダリアの電照と保温による抑制栽培 冬のダリアは長持ちします



▲ 無加温ハウスでのダリア栽培

ダリアは、花形と鮮やかな色から切り花として最近人気がありますが、夏出荷の通常栽培では高温下で花持ちが非常に悪く、直売所へのお荷は限られていました。当事務所では、電照と保温による抑制栽培によって花期を秋から初冬に遅らせることで、花持ちの向上と、切り花の少なくなる時期の有望品目として活用できると考え、講習会(7月)と栽培試験(9~2月)を行いました。河南町と富田林市の2ヶ所で栽培試験を行ったところ、9月下旬苗定植、無加温栽培



▲ 開花した大輪ダリア「熱唱」

培(12月初旬から2重被覆)で12月下旬から2月上旬にかけて80cm以上の切り花が得られ、室内(最高25.0℃、最低13.4℃、平均18.4℃)で行った花持ち試験では1週間以上美しい姿を維持し、十分商品価値があると実証できました(管内の直売所において1本300円程度で販売)。

さらに採花期を長くとるための方策の一つとして、定植時期は9月上旬に行い、ピンチ時期をずらすことが良いと考えられます。一方、富田林市のハウスでは凍害による葉の褐変枯死がみられ、氷点下になるところでは3重被覆が必要であることも判明しました。

「土壌還元消毒」でハウス果菜類の土壌病害を防除

ハウス土壌病害の防除対策として、南河内地域では、夏期にハウスを閉め切って日射熱による高温で病原菌・害虫を殺菌、殺虫する「太陽熱消毒」が広く行われてきました。

しかし、最近梅雨が長引いたり、夏期にも栽培を行うことが増え、夏期高温期に消毒期間を十分に取れないことが多くなっています。

これに対して「土壌還元消毒法」は、土壌中に米ぬか等の有機物を10a当たり1t程度投入し、土壌表面を古ビニール等で覆い、土壌を十分に湿らせてハウスを閉め切り、土壌微生物の増殖を促して還元状態(酸欠状態)を起こさせ、高温との両方の効果で殺菌する方法です。

従来の太陽熱消毒に比べて、消毒期間は長く取る必要がありますが、高温のみの消毒ではないので、太陽熱消毒のように真夏に限られることなく、5月後半から10月前半頃まで長期間にわたって実施できます。

※太陽熱消毒 : 期間10~14日、温度40~45℃以上、
土壌還元消毒 : 期間約20日、温度30℃以上

- 課題 ①土壌を還元状態にすると悪臭を発生することがあること
②有機物資材投入にコストがかかること

農の普及課ではH23年度から、河内長野市日野の若手農業者が栽培するトマトハウスで、トマト青枯病対策のための土壌還元消毒法展示ほを設置しています。有機物資材として昨年度は米ぬか、今年度は糖蜜を施用し、ともに高い効果があることを確認しています。

